

第8章 図書・電子媒体

8-1 図書館

達成目標（1）

蔵書を保管する十分な書庫スペースを確保する。

行動目標

- （a）書庫の抜本的拡充（保存館構想の実現）をする。
- （b）旧版図書、重複図書の整理や附属図書館内の分担保存を進めるとともに、電子ジャーナル・データベース・電子出版資料の導入に伴う図書資料の整備をする。

現状説明

行動目標（a）具体的取り組み

2009年度は、13号館分館（湘南校舎）開架室に約2,050冊収容の書架を増設済みである。2010年度は、高輪図書館が新設され約99,400冊収容可能となった。12号館分館（湘南校舎）では書庫の書架増設が2011年度に計画されており、新たに約2,650冊の収容が可能となる。また、清水図書館でも書庫に約2,500冊収容の書架増設を計画中である。附属図書館の中でも狭隘化の著しい中央図書館（湘南校舎）では13万冊収容のスペース確保を目指し図書館書庫増設計画が進んでいる。湘南校舎5号館1階延べ2,771.61㎡のうち、移転可能な研究室を2011年3月末までに調査し、その後、書庫として利用できるように改修工事を計画している。現在までの移転可能な研究室は353.45㎡であり収容可能冊数を算出すると86,240冊となる。2009年度中央図書館（湘南校舎）受け入れ数22,940冊から算出すると約3年分の収容スペースの確保ができる。

行動目標（b）具体的取り組み

- i) 2009年度は約2万7千冊を除籍及び廃棄し、資料の保存スペースの確保をした。2010年度は約2万8千冊を除籍及び廃棄予定であり、2011年度以降も学部改組改編を見据えて、計画的に除籍及び廃棄を行い配架スペースを確保する。
- ii) 附属図書館内で重複して収集している紀要の分担保存を実施するに当たり、紀要収集方針を明文化して2010年度附属図書館館長会議に提案し了承されている。その運用については、札幌図書館と旭川図書館間で先行して紀要の分担保存を調整済みである。
- iii) 中央図書館（湘南校舎）では電子化された他大学紀要受入中止処置を2009年度より実施しており、今後も継続して実施予定である。現在までに約190タイトルについて寄贈先への謝絶連絡が済んでいる。
- iv) 紀要の電子化は、東海医学会の“The Tokai Journal of EXPERIMENTAL and CLINICAL MEDICINE”が既にWeb上で公開されているほか、情報通信学部もWeb化が具体化しており、各学部等の研究成果物である紀要のWeb化が2011年度から推進される計画にある。

点検・評価

<行動目標（a）の実現度> B

湘南校舎における図書館書庫増設計画は、まだ計画途中の段階であり目標の達成がやや不十分であるため実現度の自己評価は「B」である。

＜行動目標（b）の実現度＞A

行動目標に掲げた年間1万冊の除籍は達成されているので、自己評価は「A」である。

＜成果と認められる事項＞

i) これまで効果的な対応がとれなかった中央図書館（湘南校舎）の狭隘化対策は、図書館外の建物にスペースを確保することが現実的になり、具体的な計画を立案できるまでになった。

ii) 三大学統合後、2009年度に初めて実施した附属図書館全体の除籍及び廃棄は、中央図書館（湘南校舎）が中心となって調整をしながら作業が完了した。2010年度も同様に除籍及び廃棄作業を実施中である。

＜改善すべき事項＞

紀要は附属図書館全体での分担保存の調整作業や、学部等によっては電子媒体への移行がまだ進んでいない。

今後の改善・改革に向けた方策

＜長所の維持・伸長方法＞

i) 湘南校舎5号館の書庫改装計画を具体化する。

ii) 学部改組改編による不用資料の整理・廃棄・移動を行う。

＜改善方策＞

紀要の分担保存は中央図書館（湘南校舎）が中心となって、2013年度までに他大学紀要の保存館・非保存館の振り分けや、受け入れ済み紀要の見直しを行いスペースの確保を推進する。電子媒体へのシフトに関しては、機関リポジトリ導入の最近の動きとして国立国会図書館主導のデジタル化事業により、1991年度から2000年度までの学位論文（博士）のデジタル化を実施し、公開が予定されている。公開後はデジタル化された学位論文データが学位授与大学に譲渡される。本学としても新たな展開が可能となるため、図書館としても関係各部署に働きかけていく。

達成目標（2）

図書館におけるインフラを整備し、電子媒体（電子ジャーナル等）の利用率を向上させる。

行動目標

- （a）電子ジャーナル及び学術情報データベースの利用方法を周知するため定期的な利用説明会を行う。
- （b）電子ジャーナル、学術情報データベースと電子ブックの受け入れを増加する。
- （c）情報検索コーナーの拡充など、IT学習環境を整備する。

現状説明**行動目標（a）具体的取り組み**

付属図書館では文献検索・論文作成・就職活動の支援として、学術情報データベース利用説明会を開催している。各校舎の学科構成や利用者のニーズに合わせた内容を図書館で計画し、春学期・秋学期に定期的に行うほか、希望に応じて随時受付けている。広報活動はポスターやホームページを中心に行い、出席希望者は各図書館窓口で直接申込むか電子メール、もしくは図書館のホームページから申込める。中央図書館（湘南校舎）では更にキャンパスライフエンジンからも申込みを受付けている。2009年度説明会の実施回数は、全校舎で合計42回、出席者数は延べ546名となった。前年度と比較するとやや減少しているが、中央図書館（湘南校舎）に限れば14回104名から17回235名と大幅に増加している。

中央図書館（湘南校舎）では説明会の内容充実と出席者増を目指し、2010年度新たにプロジェクトチームを結成した。説明会時に回収しているアンケート結果を参考に、授業と重ならないような日程設定や、学科に応じた個別の広報活動、学生のニーズに合った説明会へと内容の見直しを行った。専門の講師のほか図書館員も担当し、電子媒体資料に関する知識など館員の自己研鑽の一助にもなっている。

行動目標（b）具体的取り組み

2009年度電子媒体資料は付属図書館全体で81種類と前年度と同様であったが、電子ジャーナルは約4.6万種類の閲覧が実現しており、各校舎図書館での個別契約もあり増加した。既に契約済みの電子媒体資料に関しても、それ自体のコンテンツが年々増加しており、契約を継続させることで結果的に利用可能な電子媒体の資料点数は増加している。

電子媒体資料の利用契約に関しては、出版社による価格高騰が続いており、円高にも関わらず依然厳しい状況である。本学では対抗策として、出版社との直接交渉ならびに、全国的な連携による価格交渉と契約条件の改善を主な目的とするPULC（公私立大学図書館コンソーシウム）に加入し、学術情報の安定した提供に努めている。

2009年度中央図書館（湘南校舎）が契約した電子媒体資料の利用アクセス状況（抜粋）は、下表（参考データ）のとおりである。

(参考データ) 湘南校舎が契約した電子媒体資料の利用アクセス状況 (抜粋) 2009年度

名称	接続校舎	本文閲覧 アクセス数 (件)	アクセス1件 あたりの金額 (円)	費用対効果
CiNii (NII論文情報ナビゲータ)	全校舎+3病院	90,900	10	高い;第1位
化学書資料館	全校舎	6,000	70	高い;第2位
日経BP記事検索サービス	全校舎	15,305	82	高い;第3位
MathSciNet	全校舎	5,620	103	
JDreamII	湘南、代々木、高輪、沼津、清水	45,907	104	
日経テレコン21	全校舎	15,089	167	
Journal Citation Reports	全校舎+3病院	4,458	362	
Web of Science	全校舎+3病院	5,867	1,410	
ProQuest Central	全校舎+3病院	1,952	2,673	
Springer eBooks Collection	全校舎	368	8,722	低い;第3位
Historical Abstracts	湘南、代々木、高輪、沼津、清水、伊勢原	51	13,725	低い;第2位
Mergent Online	全校舎	300	17,063	低い;第1位

※接続校舎：全校舎（湘南、代々木、高輪、沼津、清水、伊勢原、熊本、阿蘇、札幌、旭川）、
3病院（東京病院、大磯病院、八王子病院）

2008年度費用対効果がワーストであった「Literature Resource Center」（2009年12月中止）のアクセス1件あたりの金額89,303円と比べても、今年度のワースト「Mergent Online」のアクセス1件あたりの金額は17,063円と少額となり、全体的な利用アクセス数も増加している。

電子媒体資料の契約は、利用アクセス数のみを基準に電子媒体資料受入の可否を決定するのではなく、稀少な学術資料に関しては代替資料の有無も含めて検討も必要である。特に他図書館と重複購入している洋雑誌については、電子ジャーナルを受け入れることで共有化が図れ、全学的な利用が可能となる。

費用対効果が低い電子媒体資料の利用促進を図るためには、学術情報データベースに対する認知度を上げることがまず肝要であり、利用説明会を頻繁に開催するとともに、利用状況に応じた電子媒体資料の選定（受入・中止）を行っていく。

行動目標（c） 具体的取り組み

情報検索設備として、情報検索用パソコンは全ての付属図書館に配置され、図書館の電子媒体資料の普及・活用の一助となるとともに、コンピュータ室以外のパソコンを経由して利用できる点は利用者からも好評である。2009年度以降新規・改善予定の図書館インフラ整備は次のとおりである。

i) 無線 LAN の設置申請

情報検索端末について、全館では TIME-OPAC（東海大学蔵書検索システム）専用パソコン85台、情報検索用パソコン173台を設置している。また、中央図書館（湘南校舎）と熊本図書館以外は有線・無線 LAN 用情報コンセントを設置し、利用者自身の持ち込みパソコン使用に対応している。今後持ち込みパソコンの利用増加を視野に入れ、中央図書館（湘南校舎）は無線 LAN の新設を申請中、熊本図書館は有線・無線 LAN 設置に向けた計画段階であり、札幌図書館と伊勢原図書館でも有線・無線 LAN を増設申請中である。

ii) SFX リンクリゾルバを導入

電子ジャーナル検索システムを2011年4月より SFX リンクリゾルバに変更する。SFX は電子ジャーナル、学術情報データベース、TIME-OPAC など多種多様なデジタル資源をリンクで結び、最適な情報へアクセスできる電子情報ナビゲーションツールである。既に伊勢原図書館で導入済みであるが、付属図書館全館で統一することにより、一元的なシステム

の提供による利便性向上が見込まれる。

iii) マイクロ（フィルム）スキャナの購入

マイクロ資料は今まで拡大画面の閲覧と紙での印刷が主だったが、11号館分館（湘南校舎）でスキャナを導入することにより、スキャンした画像はデータとしてパソコン保存が可能になる。また、読み取ったデータの管理、編集が容易になり、オペレーターは、マイクロフィルムの検索作業を簡単かつ効率的に行うことができ、マイクロ資料の幅広い活用が可能である。

iv) 情報検索性パソコンの整備

電子媒体資料のアクセスのほか、履修登録、レポート作成用として附属図書館全館に情報検索性パソコンを設置している。中央図書館（湘南校舎）、高輪図書館、沼津図書館以外は図書館内に専用のプリンターもしくはTIME-OPACと兼用のプリンターが1～2台設置されている。中央図書館（湘南校舎）は2010年4月にオンデマンド印刷が可能となり、構内のコンピュータ室で印刷できる。

点検・評価

<行動目標（a）の実現度> B

出席者数前年比+3%には至らなかったが、内容の充実した説明会の開催と中央図書館（湘南校舎）に限れば2倍強の出席者増加が見られたので、実現度は「B」と自己評価できる。

<行動目標（b）の実現度> A

電子ジャーナル・学術情報データベース・電子ブックそれぞれの収蔵点数は膨大で更新頻度も高く、厳密には詳細な数値は押さえきれないが、電子ジャーナル約4.6万種類が毎年確実に増加し、+3%程度の伸びが確認されたため「A」と自己評価できる。

<行動目標（c）の実現度> A

関係部署と協力しながらソフト・ハード面ともにIT学習環境の整備に向けて環境改善に取り組んでおり、実現度は「A」と自己評価できる。

<成果と認められる事項>

電子ジャーナル・学術情報データベース・電子ブックの受入増と利用率がアップした。限られた予算内で電子媒体資料の選定、受入を強化し、利用者への資料提供と利用率向上に努めた。

<改善すべき事項>

学術情報データベース利用説明会の出席者数について、前年比+3%を満たせなかった。

今後の改善・改革に向けた方策

<長所の維持・伸長方法>

現在の図書館情報システム iLiswave のサポート終了に伴い、2011年度末に新システム iLiswave-J へ更新予定である。iLiswave-J は、利用者個人認証システムによる利用状況確認や文献複写・相互貸借の申込など Web 上で多様な利用者サービスが可能となり、利用者により充実した図書館 IT 環境を提供できる。また電子媒体資料の利用については、デジタル資料管理・ナビゲートシステムである SFX リンクリゾルバを附属図書館で導入することで校舎間の差異もなくなり、資料収集の更なる利便性向上に繋がる。

<改善方策>

学術情報データベース利用説明会の出席者の増加や、電子媒体資料の利用率向上には、効果的な広報活動や教員との協力体制が不可欠である。図書館においては、説明会の年間スケジュールを立て、早い時期から広報活動を行う。さらに図書館利用ガイダンスを申込んだ教員には、利用説明会を個別に紹介し、授業やゼミナールで電子媒体資料を活用してもらえるように働きかけるなど、新しい取り組みを立案し実施する。

また、利用説明会に出席できない利用者には、利用説明会資料のPDFファイルを図書館ホームページで公開するなどして、学術情報データベースの利用案内がいつでも見られるようにし、利用率の向上に繋げる。

達成目標（3）

自ら考える力を育むために、学生の図書館入館者数（利用者数）を前年度より増加させる。

行動目標

（a）カリキュラム、シラバス、初期教育並びに教養教育と連動した図書資料の収集及び専門図書の充実を進め、利用者数、貸出冊数の増加を図る。

（b）リモートアクセスの導入など、非来館型の電子図書館サービスを拡充する。

（c）利用形態の多様化に応えるために利用満足度を調査し、施設・設備を整備するとともにサービス内容を見直し実施する。

現状説明**行動目標（a）具体的取り組み**

建学の精神に謳われている「思想を培う」基礎となる「現代文明論」や、文理融合の現代教養科目に即した資料、学部のカリキュラムの基礎となる資料を体系的に収集するために、「東海大学附属図書館規程（第1章第3条：研究及び教育支援に必要な図書館資料の収集）」に基づき、「東海大学附属図書館資料収書方針」を明文化した。さらに、各校舎図書館においては、それぞれの学部および学科構成等を考慮した「選書基準」を明文化し、2010年度附属図書館館長会議にて提案し、了承を得た。これにより特色ある蔵書構築が明確なものとなった。今後も利用者ニーズに合わせた図書館資料を収集し、利用者数・貸出冊数の増加を図る。

行動目標（b）具体的取り組み

図書館における利用者の情報収集の多様化により、来館型および非来館型を問わず、利用者の求めている情報を迅速・的確に提供していくため中央図書館（湘南校舎）では、2010年度春学期で121回2,836名の参加者への図書館利用ガイダンスにおいて、学術情報データベースの紹介を行った。他校舎においても、すべての図書館で図書館利用ガイダンスによる情報リテラシー教育が実施されており、伊勢原図書館では約730名（研修医、看護師等含む）、高輪図書館では約560名、熊本図書館では約280名、札幌図書館では約150名の参加があった。さらに、中央図書館（湘南校舎）では、図書館独自に2010年度春学期で9回167名の参加者の学術情報データベースと電子ジャーナルの利用説明会を企画・開催し、文献データベースの利用促進と活用に取り組んでいる。これらの情報リテラシー教育に対しは、全館員が講師として対応できるよう、自己研鑽に努め専門性のスキルアップを図っている。

学術情報データベースと電子ジャーナルは、図書館ホームページからのアクセスが主流となるため、学内のどこからでも24時間利用が可能である。特に図書館蔵書検索については、学内外問わず24時間アクセス可能である。電子的なサービスの比重が高くなるに従い、研究者の図書館利用方法が、来館利用から非来館型の電子的サービス主体へと移行していることが伺える。

行動目標（c）具体的取り組み

中央図書館（湘南校舎）においては、2009年度に利用者の多様なニーズに応えるため、

利用者サービスの認知度アンケート調査を行った。その結果、学生の利用者サービスの認知度は教員からの情報が大きい（アンケート回答の7.9%に相当）ということが判明した。その調査結果を受け、教員へのインタビューを実施し、2010年度の初年次教育に絡めた授業時間内での図書館利用ガイダンスの実施を呼びかけた。

さらに2010年度は、中央図書館（湘南校舎）だけではなく、全校舎の図書館で【満足度・活用度】などに関するアンケート調査を実施し、課題の可視化を図っている。その結果、運用ルールの均一化とサービスの均質化を図ることができ、校舎間でのサービス連携が強化された。

点検・評価

<行動目標（a）の実現度> B

貸出冊数前年比+3%には至らなかったが、中央図書館（湘南校舎）ホームページへの各ページのアクセス数において、学術情報データベースガイドや電子ジャーナルなど電子的なサービスのページが上位を占めている。また、電子ブックやリモートアクセス可能なデータベースを、ほかの附属図書館に先駆けて導入してきた伊勢原図書館においては、それらのアクセス回数が2009年度と比較しても増加している。特に、日本語の医療系電子ブックにおいては、2010年1月から11月現在までに約24,000アクセス閲覧され、電子的な資料による非来館型利用が増加している。

加えて、収書方針および選書基準を明文化し、各校舎図書館において蔵書構築が明確なものとなったことにより、相互協力サービス件数の伸びにも繋がり、「B」と自己評価できる。

<行動目標（b）の実現度> B

図書館利用ガイダンスの開催回数が増加し、参加者が増えたことにより、学術情報データベースのうち利用頻度の高いCiNiiやJ-DreamIIについては、窓口での利用者からの質問も多く、日に数回程度の利用指導を行っている。そのことにより、情報リテラシー教育が浸透していると判断できるため、「B」と自己評価できる。

<行動目標（c）の実現度> A

2009年度、2010年度ともに利用者に対して「図書館の認知度」「図書館の満足度」に関するアンケート調査を実施し、「施設・設備・サービス内容の整備実施」に向けて分析を進め、具体的な施策に取り組んでいるため、「A」と自己評価できる。

<成果と認められる事項>

利用者に対するアンケートを中央図書館（湘南校舎）は2009年度、全校舎図書館では2010年度に実施し、課題の可視化が図られ、今後の取り組みが明確になった。また、中央図書館（湘南校舎）では、インタビュー実施により教員との連携が強化された。

<改善すべき事項>

現在、達成目標の指標である入館者数（利用者数）前年比+3%の数値に至っていない。なお、近年増加傾向にある非来館型の利用者数は、直接来館者数としてはカウントされていない。

今後の改善・改革に向けた方策

<長所の維持・伸長方法>

カリキュラムやシラバスの更新に合わせて、魅力ある図書館資料を受入れ、利用者の満

足度を向上させる。アンケート結果に基づき、利用ガイダンスや学術情報データベース説明会も適宜行い、図書館利用についての啓蒙活動を充実させる。

<改善方策>

来館型および非来館型を問わず、対象者のニーズに沿った質の高い支援サービス提供していく必要がある。早急な対策としては利用者来館型における接点業務の改善や貸出規則・貸出冊数の見直しを行い、利用規則の平準化などにより利用者の便宜を図る。

また、非来館型利用者の増加策として、Webによる申込サービス、電子媒体の導入、リモートアクセスの提供など、利用者のアクセス環境の多様化に対応したサービスの拡大に取り組む。